

小学校歴史学習における国際教育（1）

—その実践への展望—

千葉 昇

1. はじめに

日本人のルーツを始め、鉄器・稲作の伝来に、縄文・弥生・古墳文化の持つ国際性と多様性と……古代においても日本歴史のエポックは常に国際交流の中で生み出されてきた。

それに続く、大仏建立に正倉院、かな文字の発明と国風文化、蒙古襲来、鉄砲・キリスト教伝来と南蛮文化……これもまた文化の大きなエポックの原動力は国際関係からもたらされたものである。

更に、概念が変わりつつある鎖国、幕末の黒船来航から明治維新、日清・日露戦争に世界大戦……そして第2・第3の黒船を経てグローバリゼーションという第4の黒船へと、今や世界との接触無しに日本の未来を語ることはできない。

それは取りも直さず大陸を通した異文化接触、多文化接触の歴史であり、時にはそれを取り入れて独自の文化に適応・発展・統合させ、この日本を形成してきた。

言い換えるならば、日本の歴史を学習すると言うことは、大陸を軸とした東洋史はもちろんのこと、世界史の中の日本形成・日本文化形成の足跡を追究し未来を見つめる営みと言うことができる。これはまさにこれからの国際教育の核を為すものであり、グローバルヒストリーの捉えの中で、異文化間・多文化間の視点に立って、歴史学習を捉え直そうとする試みである。本稿はその実践への視点を定め、学習構成への手がかりを探る取り組みである。

2. 歴史学習におけるグローバル化

嘗て使われていた「国際化」の用語は、今や国際化していない国内でのみ用いられる内なる意味からの限定用語となっており、急激にネットワーク化が進む現代世界では、地球規模からの世界を俯瞰して位置づける「グローバル化」が一般用語となり、指導要領等での記述も全面的に更新されている。

グローバル化する現代社会において、1国対1国を対比基軸とする異文化理解だけの視野ではもはや関連・関係を捉えきれず、多国間のネットワーク世界を基軸とする多文

化共生への視野を欠かすことは出来ない^(1, 2)。

更に、学ぶ子どもたちの思考の立脚点は、異文化における相違点と共通点を第三者として平等に見つめる「異文化間」とする必要がある。これを多文化世界として考えるならば、自国及び自国文化も「one of them」の視野で見つめられる「多文化間」の立場から歴史を捉える多様性の思考を重視していく必要がある。

グローバル・ヒストリーでは、対象となるテーマと空間の広がりという観点を持って事象を見つめる歴史解釈の見直しが迫られる。そして、自国史や地域史に留まらず、相互関係の空間と時間の中で歴史を捉え直す新たな視角が特色となっている⁽³⁾。それは、「人・物・金・情報」の「交流の諸相」であり、まさにネットワーク世界の相互の影響関係の中で歴史を描き出そうとする試みとなっている^(4, 5)。

一国史はもとより、地域史を越えた地球規模の相互関係で歴史を描き出すことがグローバル化の中で歴史学習を考える帰結であり、歴史を未来へ活かす学びになるものと受け止めている。

もっとも自国史を描くための日本史学習ではなく、東洋史の中での日本史学習にも留まらず、絶えず世界史の中の日本史学習を描く方向性は、「国際化」から「グローバル化」への歴史融合を必要としていることは言を待たない。この学習方向は、学習指導要領の変遷の中でもすでに顕れており、中学校では「世界史を背景とした日本史」が目標に掲げられて久しいものがある。そして高校においては、今回の改訂で「歴史総合」という新科目としての融合実践の中で、学習者の学びを構築しようとしている。歴史の初発の学びとなる小学校においても今後、この実践の方向が益々求められていくことは言うまでもない。

3. 小学校歴史学習における「国際教育」の視座

すべての教育において「国際教育」を定義して世界に提案したものとしては、1974年のユネスコによる勧告がある。所謂「74勧告」と呼ばれるものであり、その指導原則では、以下の抜粋に示す通り、7つの教育政策が実践的な方向性を持って提案されている⁽⁶⁾。

- (a) すべての教育に国際的側面及び世界的視点をもたせること
- (b) すべての民族並びにその文化、文明、価値及び生活様式に対する理解と尊重
- (c) 世界的な相互依存関係の増大の認識
- (d) 交信する能力

- (e) 権利を知るだけでなく、それぞれの相互の間に権利のみならず負うべき義務が有ることの認識
- (f) 国際的な連帯及び協力の必要
- (g) 個人がその属する社会、国家及び世界全体の諸問題の解決への参加

「74 勧告」は、すでに 47 年前に、国際理解教育の枠を超えた現代の「国際教育」の枠組みを提案しており、その実践化を行動指針として求めていたのである。この「74 勧告」の指針を土台に、前述してきた歴史学習におけるグローバル化を志向する時、以下の 3 つの視座が浮かび上がる。

- (1) 比較・関連という総合的視点で歴史事象を分析・思考し、相互関係の深化の中で歴史を描く

歴史学習においては、常に国際関係の側面を取り上げ、地球規模のグローバルな視点で歴史的事実を見つめ、多様性と相互作用を追究していく必要がある。これはネットワーク世界の相互依存関係の中で、事象が絶えず双方向に作用して動いていく事を捉えるグローバルヒストリーの視座に同じである。ナショナルヒストリーとしての内なる日本史枠を越えて、歴史的事象を世界史のグローバル関係に位置づけて描くと、支点や力点となる原因や背景、そして作用点となる影響の方向が変わってくる。嘗て実践した「幕末の嵐」の単元を具体例にあげるならば、「日本から見た外国・外国人、外国から見た日本・日本人」の追究の中で、ペリー来航の捉えが子どもたちの思考の中で変化していった事例が挙げられる⁽⁷⁾。

- (2) 異文化間・多文化間という複眼的立場から俯瞰追究し、批判的構築力で思考を組み立てる

グローバルイシューに対する連帯と協力、そして行動参加を訴える「国際教育」は、異文化・多文化の理解に留まらず、相互間の客観的立場で思考・判断・行動する異文化間・多文化間の複眼的思考を求めていく必要がある。国際会議に往々にして見られる批判の終始に終わるのでなく、あくまでも「合意形成を目指した批判的理解力と構築力」を持って歴史を考える事が、未来への一歩に繋がるものとなる。COP26 における温暖化への行動対応、或いはカーボンニュートラルやメタン削減への実行動は、まさにその顕れであり、SDGs の行動への取り組みも同様の視座からの現代歴史への提言といえよう。

- (3) 全ての生活や文化、そして人権への相互理解と尊重を持ち、その多様性と共生への思考を共有する

地域間に国家間、民族間や宗教間、文化・文明間に、時には時代間の中には、本来差違や区別・差別はなく、相互理解が尊重され、共通認識を支えるものでなくてはならない。その土台には、確かな自国文化への理解があることも言うまでもないが、自国内なる国際化に留まらず、上記で挙げたグローバルの視野＝異文化間・多文化間から自国文化を捉え直す必要がある。知らずに歩み寄ってくる区別・差別を越えて、違いを受容し、共通点を認め尊重し合い、全ての段階と形態の教育において現代的課題取り入れて考えていく必要がある。SDGs がクローズアップし訴えている 17 の目標は、世界が抱えるグローバルイシューへの主体的な学びであり、問題解決への行動力である。

4. 国際教育としての小学校歴史学習の実践意図

小・中・高の歴史学習の単元構成をもとに⁽⁸⁾、国際教育に関わる歴史項目を洗い出し、小学校指導要領解説社会科編⁽⁹⁾と小学校6年生社会科の教科書⁽¹⁰⁾に基づいた歴史学習の12小単元に位置づけて整理したものが、下記の一覧である。

中学校の実践に関しては、グローバルヒストリーの視点からの分析や試み⁽¹¹⁾も参考にして取り入れている。高校についても、「歴史総合」における近代以降の試みも参考にしていく。

| | 時代の流れ | 国際教育関連項目 | 指導のポイント(番号は小学校歴史単元) (◇は重点項目) |
|----|---|---|---|
| 原始 | <input type="checkbox"/> 日本のあけぼの ○文化のはじまり ○農耕社会の成立 ○古墳とヤマト政権 | <ul style="list-style-type: none"> ・日本人のルーツ ・縄文・弥生文化 ・青銅器と鉄器 ・稲作の伝来 ・戦のはじまり ・古墳と古墳文化 | ①縄文のむらから 古墳のくへ ・南北から渡来する祖先 ◇縄文人と弥生人 ◇世界一古い縄文土器 ・三内丸山遺跡 ・邪馬台国 ・吉野ヶ里遺跡 ・「親魏倭王」の卑弥呼 ・倭の五王の朝貢 ◇副葬品の国際性 ・渡来人の技術や文化 |
| 古代 | <input type="checkbox"/> 律令国家の形成 ○飛鳥の朝廷と文化 | <ul style="list-style-type: none"> ・仏教伝来 ・漢字の伝来 ・聖徳太子 ・飛鳥文化 ・遣隋使 ・大化の改新と対外 戦争 ・大宝律令 ・白鳳文化 | ②天皇中心の国づくり ・古墳から寺院へ ◇国際情勢の中での国の政策 ◇世界一古い木造建築の法隆寺 ◇遣隋使小野妹子 ・白村江の戦い ◇大陸に学ぶ律令制 ・高松塚古墳 |

| | | | |
|----|--|--|--|
| 古代 | | <ul style="list-style-type: none"> ・大仏建立と正倉院 ・天平文化 ・国史と万葉集 | <ul style="list-style-type: none"> ◇長安に学ぶ平城京 ◇大仏建立 ◇正倉院宝物 ◇遣唐使 ◇鑑真 ・古事記, 日本書紀, 風土記, 万葉集 |
| | □貴族政治と国風文化 | <ul style="list-style-type: none"> ・藤原氏と摂関政治 ・唐風文化から国風文化へ ・荘園 ・平安仏教 ・新羅, 刀伊の入寇 | <p>③貴族のくらし</p> <ul style="list-style-type: none"> ・平安京と ◇国際関係の変化と遣唐使廃止 ・寝殿づくりと貴族の暮らし ・国文学の発達 ◇仮名・真名文字の発明 ・密教 ・武士の登場と武士団 |
| 中世 | □中世社会の成立 ○院政と平氏の台頭 | <ul style="list-style-type: none"> ・院政 ・平氏政権 ・幕府と封建制 ・御成敗式目 ・承久の乱 ・武士の暮らし ・中世文学と鎌倉新仏教 ・蒙古襲来と幕府の衰退 | <p>④武士の世の中へ</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保元・平治の乱と武士 ・日宋貿易 ・源平の争乱 ・源氏と執権北条氏 ・琉球とアイヌ ・武家造り ・東大寺南大門 (大仏様建築) ・運慶と快慶 ◇文永・弘安の役 |
| | ○鎌倉幕府の成立 ○鎌倉文化 ○武家社会の成長と室町文化 | <ul style="list-style-type: none"> ・建武の新政と室町幕府の成立 ・倭寇と日明貿易 ・守護大名から戦国大名へ ・土一揆 | <p>⑤今に伝わる室町の文化</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇日本文化の底流 (水墨絵 立花 茶道 能・狂言) ◇雪舟 ・禅宗文化 ・応永の外寇 ・自由都市 堺 |
| 近世 | □天下統一と桃山文化 | <ul style="list-style-type: none"> ・ヨーロッパ人のアジア進出 ・織豊政権 信長・秀吉・家康 ・桃山文化 ・江戸幕府の成立 幕藩社会の構造と安定 ・大名統制と身分制 ・鎖国政策と世界への窓 ・元禄文化 | <p>⑥戦国の世から天下統一へ</p> <ul style="list-style-type: none"> ◇鉄砲とキリスト教の伝来 ・キリシタン大名 ・天正遣欧使節 ◇信長と南蛮文化 ◇秀吉の全国統一と朝鮮侵略 |
| | □幕藩体制の確立 | | <p>⑦江戸幕府の政治の安定</p> <ul style="list-style-type: none"> ・江戸初期の外交 朱印船 日本人町 支倉常長 琉球 ◇キリスト教の禁止 ◇長崎貿易と出島 ◇朝鮮通信使 ・歌舞伎 |

| | | | |
|----|---|--|---|
| 近世 | <input type="checkbox"/> 幕藩体制の動揺 | <ul style="list-style-type: none"> ・幕政改革 ・洋学 ・化政文化 ・鎖国の動揺 ・開国と幕末の動乱 ・戊辰戦争と幕府滅亡 | <ul style="list-style-type: none"> ・数寄屋造り ⑧町人の文化と新しい学問 ◇浮世絵（ジャポニズム） ◇蘭学と国学 洋学 ・外国船の来航 ◇黒船来航 ◇条約締結と尊皇攘夷 |
| 近代 | <input type="checkbox"/> 近代国家の形成 <input type="checkbox"/> 2つの大戦とアジア ・占領下の日本 | <ul style="list-style-type: none"> ・明治の改革 ・富国強兵と殖産興業 ・文明開化 ・立憲国家の成立 ・日清戦争 ・日露戦争 ・明治の文化と近代文学 ・第1次世界大戦 ・産業革命 ・大衆文化 ・日中戦争 アジア・太平洋戦争 ・第2次世界大戦 ・沖繩戦と原爆投下 ・敗戦・占領と改革 ・日本の民主化 ・冷戦と講和 | <ul style="list-style-type: none"> ⑨明治の国づくりを進めた人々 ◇岩倉使節団 ◇文明開化の光と陰（お雇い外国人） ・自由民権運動と憲法制定と国会開設 ⑩世界に歩み出した日本 ・中国分割 ◇条約改正 ◇日本の中国進出 ・ワシントン軍縮 ・世界恐慌 ・日韓併合 ・満州事変 ⑪長く続いた戦争と人々の暮らし ・戦時下の日本 ・敗戦と占領政策（第2の黒船） |
| 現代 | <input type="checkbox"/> 高度成長の時代 <input type="checkbox"/> 激動する世界と日本 | <ul style="list-style-type: none"> ・経済復興から高度成長へ ・経済大国への道 ・バブル崩壊 ・冷戦終結 ・平成から令和へ ・新冷戦 | <ul style="list-style-type: none"> ⑫新しい日本 平和な日本 ・朝鮮特需 ◇サンフランシスコ平和条約 ・日米関係（第3の黒船） ◇東京オリンピック ◇第4の黒船 （国際化からグローバル化へ） ◇ネットワーク世界と相互依存関係 ・石油危機 ・東日本大震災 ・高度情報化 ◇SDGs Cop26 |

いずれの校種においても実践に位置づけるとき、双方向のベクトル、そして「相互作用→相互関連→相互関係」を軸として内容構成していくことは、不可欠の取り組みと考えている。

中・高の時代区分による歴史単元構成ではなく、エポックとなる歴史事象を串で貫く団子形式で構成し、人物と文化遺産で描き出す小学校の歴史学習の特徴を生かして国際項目を整理していくと、以下の3点の学習方向を挙げる事が出来る。

(1) 相互依存関係のベクトルで分析・追究する歴史学習

国の形成や文化形成の流れは、絶えず相互依存関係のベクトルの大きさと方向によって大きなエポックとなる。絶えず歴史的事象を「日本から見た外国」「外国から見た日本」といった複眼的思考で分析・追究していく必要がある。ナショナルヒストリー（自国史・国家史）を越えて国際情報を踏まえた外から見る視野拡大の必要性である。

例えば「聖徳太子の対外政策」の学習であれば、対等関係を求めた遣隋使派遣の背景には、変化するアジア情勢の中で、的確な国際情報を掴み国家政策として政治決断していった結果と考えることができる。

又、本格的な対外戦争への対処という「元寇」の学習も、モンゴルの世界帝国形成の国際情勢の中で、戦争という異文化接触到に巻き込まれるアジアの国々を含めて異文化間に立って俯瞰すると、この事象もまた多文化間の織りなす歴史的背景に起因した問題となってくる。

(2) グローバルの視野からの文化受容・吸収・適応・発展・統合

文化形成においては、受容・吸収・適応を越えて、文化の自国化という発展・統合の捉えが必要となる。

例えば、「大仏建立と正倉院」の学習では、鑄造佛としては当時世界一の仏像を生み出す背景として、中央集権の大きな政治権力の成長とともに、渡来文化を受容・吸収・適応し、創造にまでの発展・統合を文化として捉える必要がある。正倉院の宝物は、その文化集積としての欠かせない成果として受け止めることが出来る。

又、平安時代の「仮名の形成」の学習に至っては、まさに独自文化の発明といえる段階の統合であり、自国文化形成に欠かすことの出来ないドラスティックな歴史事象としての考えることが出来る。

(3) 異文化・多文化から異文化間・多文化間への学習構築

国際教育の関連項目を見ると、自国形成の為の理解として、異文化間・多文化間に立脚した学習方向の検討が必要となる。相互関連の方向性や双方向の影響、そしてネットワークとしての関係性を追究していく学習が不可欠となる。

例えば、「古墳の副葬品」の国際性を考えるとき、ベクトルの太さの違いはあるものの、当時の交易が航海技術の未熟さを越えて、相互に必要な感を持って求め合っていた熱量が描き出せる。繰り返しの失敗の中で実現した「鑑真来日」の学習においても、戒律の未熟な日本の仏教状況を踏まえた異文化間からの相互交流の熱量を受け止めて成立したという学習となる。今に伝わる日本文化の底流となる「雪舟の水墨画の大成」の学習も、

異文化交流の中から、独自性を創造していく発展・統合の捉えが必要と考えている。

ペリーによる「日本開国」の歴史的影響や、明治の「文明開化の光と影」の再検討に於ける御雇外国人の活動も、異文化間・多文化間交流が生み出した価値と問題点を学習していく必要があると考えている。

いずれにしても、相互関連・関係と双方向のベクトルの影響力の捉えが、学習テーマの広がりや学ぶ価値の深化をもたらしていくことは、歴史学習の進化・発展をもたらすことと考えている。

5. 今後の課題

「グローバリゼーションとは、世界がより相互に結合して相互に依存していく過程」とリン・ハントは強調する⁽¹²⁾。国際教育の視座で歴史の相互関係を見直す事は、ネットワーク社会の深まりのプロセスで求める国際的市民性の涵養でもあると受け止める。

子どもたちの歴史意識の中に国際教育の視野を醸成するには、異文化・多文化から異文化間・多文化間、延いては多文化共生の相互関係を追究する学習構成と学習教材の実践的開発の積み上げが今後の急務の問題と考えている。

更に歴史学習に於ける国際教育の学びは、過去を見つめて今を考察し、未来を考える学習を特徴として持つ。来年度から実施となる高校に新設された「歴史総合」も又、世界と日本の歴史を融合して未来を考える近代以降の国際的市民性育成のための学習である⁽¹³⁾。多様性を追究する多方面からのアプローチは、相互に影響し合いながら学習者へ帰結していくことが今求められている。

歴史学習として体系化していく中・高の学習の土台となる小学校歴史学習では、6年生の「日本の歴史」へ繋ぐ前に、歴史感覚の前提として「地域の移り変わり」「郷土の開発」等の学習が中学年に位置付いている。「間」に立った双方を客観視する意識は、すでにこの時点から育む必要性を考えている。

又、国際教育に関わる学びは、3学期実施の小学校6年社会科の国際単元にもある。更に3～6年の総合的学習の「国際」領域にも学習場面はある⁽¹⁴⁾。しかし、いずれも現代的課題としての地球規模の今を見つめる学習を主なねらいとしている。今後はこれらの学習との融合も考えていく必要があると考えている⁽¹⁵⁾。

注

- (1) 青木保「異文化理解」岩波新書 2001 年 pp17-40
- (2) 青木保「多文化世界」岩波新書 2003 年 pp11-27
- (3) 水島司「グローバル・ヒストリー入門」山川出版社 2010 年 pp2-8
- (4) 北村厚「教養のグローバル・ヒストリー」2018 年ミネルプア書房 pp1-5
- (5) セバスティアン・コンラート著 小田原琳訳「グローバル・ヒストリー」2021 年 pp37-60
- (6) 1974 年 11 月 19 日 第 18 回ユネスコ総会採択「国際理解, 国際協力及び国際平和のための教育並びに人権及び基本的自由についての教育に関する勧告 (仮訳)」<https://www.mext.go.jp/unesco/009/004/013.pdf> (2021.6.3 参照)
- (7) 千葉昇「黒船来航をめぐって—日本人の見た外国, 外国人のみた日本—」東京学芸大学・学部・附属 歴史教育研究プロジェクト 1988 年
- (8) 山川出版「詳説日本史B」2021 年
- (9) 文部科学省「小学校学習指導要領解説社会編」2018 年 pp106-128
- (10) 東京書籍「新しい社会 6 年 歴史編」2020 年
- (11) 佐古田康義「中学歴史学習でのグローバルヒストリーの試み」1999 年『高円史学』15 巻 pp34-55
- (12) リン・ハント 長谷川孝彦訳「グローバル時代の歴史学」2016 年 岩波書店 pp47-57
- (13) 原田智仁「歴史総合」の授業を創る 2019 年 明治図書 pp8-17 pp132-139
- (14) 千葉昇「小学校に於ける「総合的学習」のカリキュラムデザイナー—その実践的展望—」国士館大学文学部人文学会紀要 42 号 2010 年 pp61-78
- (15) 鳥飼玖美子「異文化コミュニケーション学」岩波新書 2021 年 pp15-27 pp50-64